

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 城野 真妃 所属: 北九州市立小倉総合特別支援学校 記録日: 2018年2月1日

キーワード: 肢体不自由、コミュニケーション、話し方、語順、写真、日記、自信

【対象児の情報】

・学年

小学部2年生 男児（Ｙくん）

・障害名

脳性麻痺（四肢麻痺）、知的障害

・障害と困難の内容

- ・発音が不明瞭であるため、聞き取りや内容理解は聞き手に依存する。
- ・伝えたいことがある場合は、言葉とタブレットの記録動画を用いて伝えようとするが、伝えたい内容が多岐にわたるようになってきたため、タブレットの動画だけで補うことが難しくなっている。
- ・座位での活動は難しいため、座位保持椅子で生活している。
- ・大きなアイコンをタップする以外の操作を自分ですることは難しい。
- ・頸部の姿勢保持や視線のコントロールが難しいため、視覚情報の処理は苦手であるが、昨年度からの学習で、簡単なイラストやシンボルの理解ができるようになってきている。

【活動目的】

・当初のねらい

昨年度までの取組により、語彙を増やし、身近な大人との簡単な言葉でのやりとりが可能となっており、本児の方からやりとりのきっかけ（～ですか？ ～は誰？等の疑問文）となるセンテンスが発信できるようにもなっている。本年度はある程度の語彙を獲得した本児の「伝えたいこと」の内容を引き続き丁寧に観察する。また、場所（学校・家庭・放課後等デイサービス事業所）によって「伝えたいこと」の内容に特徴があるのかという点や、伝えようとしたことが伝わっているのか等を観察し、身近な大人だけではなく、初めて会う人や、普段関わりの少ない人とでもコミュニケーションを取っていけるような支援を行いたい。さらに、より多くの人に伝える手段として、文字習得のための学習を実施する。文字学習に至るまでの基礎学習として、空間や時を表す言葉の理解を促す学習（視覚的な情報を自分で処理し、日常生活の中で生かす取組）を併せて実施していく。いずれは、文字がコミュニケーションを補う手段となることを目指す。

1. コミュニケーションの実態把握として、誰に何を伝えようとしているのかを、保護者と共通理解を図る。
2. 話し方のスキルを向上させることで、より多くの人へ具体的に伝わるようにする。
3. 平仮名の習得に向けて、空間や形を表す言葉や概念の学習を行う。

・実施期間 2017年5月23日～現在

・実施者 城野真妃

・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

昨年度の実践を通して、語彙を増やし、言葉での簡単なやりとりが可能になった。Yくんの言葉の増え方の特徴として、センテンスの再生リハーサルを重ねることで、使用する場面や文脈が合ってくるようになるという点を生かし、現在では2～3語文を話せるようになった。

休日や家庭でのことは、タブレットや連絡帳、教師の汲み取りで補っている。現在、採択者との会話に関しては、本児の生活背景を知っていることや、本児の構音への慣れ、会話のパターン等をよく知っているという理由等から、不自由なくコミュニケーションをとることができているが、採択者以外の教師には正確に伝わらないことがよくある。本児が繰り返し伝えようとするため、相手が一生懸命に汲み取ろうとするが、聞き間違われて会話が進んでしまったり、いつの間にか教師主体の会話になってしまったりしていることも多い。どうしても伝わらない場合は、諦めたり、他の話しを始めた。コミュニケーションの機会の少ない教師に対しては、タブレットの動画で近況を伝えようとするが、毎日会う教師には言葉で伝えようとする等、人によってコミュニケーションの内容や手段を使い分けている様子も見られる。「先生、iPadとって。〇〇を〇〇に見せる。」と教師に依頼することもある。しかし、タブレットに収めている動画だけではその内容と量が不足しているため、言葉だけのコミュニケーションが主である。

言葉だけうまく伝わらない際、「より正確に伝えるための手段」として、ひらがな文字の習得を目標として、昨年度から、具体物→動画→写真→イラストと、抽象的な記号でのシンボルの理解の学習を行ってきた。

○活動の具体的内容

〈 実践① 伝えている内容の実態把握 〉

昨年度の実践を通して、分かる言葉と言える言葉のギャップが少しずつ埋まってきている本児が、日常生活でどのようなコミュニケーション活動を行っているのかをビデオ撮影をして観察した。学校・家庭・放課後等デイサービス事業所の3つの場所において、コミュニケーションの傾向や特徴、困っている部分があるのか等を探った。

それぞれの場所で、無理なく行える方法として、iPadを定点で固定し、同じ時間で10分間続けて記録を取った。学校では、登校時と休み時間に10分間ずつ、家庭では、本児が放課後等デイサービス事業所から帰宅し、夕食前までの時間の10分間、放課後等デイサービス事業所では全体活動中の10分間でおおよその時間を決め、6～7月の間の2週間程度継続して撮影を実施した。この記録を基に、夏休みに保護者と懇談の場をもった。以下の表は、Yくんの場所によるコミュニケーションの特徴と、それに関して保護者と懇談をした記録をまとめたものである。

場所	特徴や内容	保護者と懇談で話した内容
学校	<p>・他の場所に比べ、友達への発信が多い。友達と決まったやりとりを楽しんだり、発信に対する友達の反応を楽しんだりしている。（「〇〇ちゃんと結婚する。」「〇〇ちゃん、抱っこしてよ。」等）</p> <p>※特に本年度転校してきたM児への発信が多い。本児の発信を何かしらの言葉で返すことができるためだと思われる。</p>	<p>・毎日会う友達だから「伝わる」安心感があるのだと思う。一定のパターンのやりとりで楽しんでいるため、相手からも必ず反応がある。</p> <p>・生活経験を共にした人を選んで、話をしているようである。（分かってくれる人に、分かってくれる内容を選んで話をしているようである。）</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>担任や慣れた教師に対しては</u>、要求や冗談を言う。「(先生、お帰りの準備をしてください。」「もう僕は大人だから先生のお家にお泊りに行く。」等) ・自分の頑張りを伝え、<u>評価してもらおうとする表現</u>が多い。「(先生、校外学習でも大人のトイレでおしっこができました。」「〇〇先生、僕のボウリングはいかがでしたか。」等) ・分かる言葉が増えてきたため、<u>集団参加の場面で、返事をしたり、手を挙げて発言したりする機会</u>が多くなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で先生達に褒められることが何より嬉しいのだと思う。 ・授業中、先生が言っている言葉(話)の内容が分かるようになってきたのだろう。集団の場でも発言している。かなり自信があるから発言するのだろう。
家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>要求が圧倒的に多い</u>。(例:「ハンバーグちょうだい。」「テレビつけて。〇〇みたい。」「〇〇するな。いやだ。」「お母さん、ちょっとだからオフロスキーのところまで連れて行ってよ。」等) ・また、<u>第三者が聞いても分からないが、保護者に通じている内容</u>がある。 ・言葉での発信を<u>分かってもらえないことはほとんどないが、学校での出来事を話すことはない</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭で、<u>要求表現が目立ったのは、自分でできることの少なさからかもしれない。自分でできることを増やしていきたい</u>。 ・親の先読みが多いかもしれない。ゆっくり話を聞ける時は、内容を知っていても話し終えるのを待とうかな。 ・学校でのことをしつこく聞くと嫌がる。分かってももらえない、十分に伝える自信がないのかもしれない。
事業所	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れた職員さんへの発信が多い。職員さんに対しては、「〇〇さんは、嫌い。」等、反応を試すような表現が多かった。職員さんが怒る、泣く等の反応を楽しんでいる。同世代への子どもへの発信はあまり見られない。 ・職員さんに発信しても、<u>たまに分かってもらえないことがある</u>。 ・分かる言葉が増えてきたため、<u>集団参加の場面で、返事したり、手を挙げて発言したりする機会</u>が多くなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員さんはマンツーマンでついてくれることも多いから、甘えている様子。 ・職員さんも、Yの話をゆっくり聞く余裕はないため、何度も何度も聞き返すことはできない。 ・放課後サポートの友達は、曜日によってメンバーが違うから、「伝わる」自信も内容もないのかもしれない。

○実態把握と懇談の結果

伝わらないであろう人に対しては、話しをしないのではないかと。自ら話す人や内容を選んでいないのではないかと。そのため、ほとんど関わりのない人に対しては、その伝える自信の無さから、どうしても黙りがちになるのではないかと等が保護者との懇談の中で出た。しかし、家庭でトイレが成功したこと等については、自ら担任に報告する。トイレの成功に関しては一定の報告パターンが決まっている。「先生、お家のトイレでも、おしっこができました。」このように、話し方のパターンがあれば、自分から様々なことを自分から発信できるようになるのではないかと考えた。

また、昨年度の取り組みにより、Yくんは3歳児程度の語彙を持ち、2～3語文を自らつむぐことができるようになってきている。しかし、それでは話しの内容が断片的にしか伝わらず、困っていることも多い。

例えば、普段は担任と実施している給食の準備を、介護等体験の学生とするように言うと、給食袋を取ってもらう要求はでき、次にエプロンを着けようと「エプロンをつけてください。」と要求した。ところが、学生が「エプロンはどこにあるの?」と尋ねると、答えることができず、黙ったままであった(エプロンは給食袋の中に入っていた)。結局、自分から発信することができず、担任を探し、「先生!先生!」とすぐに担任を呼んだ。

以上の2点を踏まえ、本年度の実践では、話し方のスキルを向上させることや、具体的に伝えるための語彙を増やすこと等を目標に実践を行った。

〈 実践② 話し方のスキルを高めて、いろいろな人に具体的に伝えよう 〉

②-1 パターンを使って日記を書こう

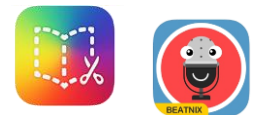
実践①の学校での表出の特徴が、褒められた経験を誰かに伝えようとする内容であった。そこで、本人が褒められた経験や、成功体験等を中心に、写真日記にして綴る学習を行った。日記の綴り方のパターンを決めることで、話し方のスキルを高めることができ、誰に対しても自信をもって伝えることができるのではないかと考えた。

Yくんは、文字に関しては未習得であるため、既存の日記アプリではなく、「BookCreator」というアプリを使用し、写真やイラストにYくんの録音した音声を貼り付けるといった日記にした。日記の書き方が、話し方のテンプレートのようになればと考え、原則として①いつ ②どこまたはだれ



③どうした ④どうだったの順に綴った。また、Yくん

が操作しやすい位置に常に iPad をセットしておくことが難しかったため、iPad がなくても日記が自分一人の力で見るように、プリントしたものを携帯用として準備した。文字に関しては、文字が音を表すことの気付きになればと思い、担任が入力し



た。毎日、マンツーマンで日記を作成するのは、時間的に難しかったため、その日の出来事を忘れないように「こえにつき」というアプリを使用して、音声だけでの手軽な日記を残した。後日、時間が取れる時に、その音声データを参考に、日記帳作りを行った。操作は主に担任が行った。

②-2 日記の内容を、知らない人にも話してみよう



日記作りをある程度経験したところで、徐々にYくんが日記帳を見ながら、学年の関わりのある教師に対して話をするようになった。そこで、毎日たくさん来校している介護等体験の学生や、学年外の先生にも伝えてみてはどうかと提案した。すると、「じゃあ、行ってみましょうかね。」とYくんが言ったため、チャレンジした。それから、毎週金曜日の午後は、「お話チャレンジ」の日となり、校内の様々な人へ日記の内容を伝えるようにした。伝わったことが分かったと、「〇〇先生にも言う。」等と本人から言うようになった。

○取り組みの結果と事後の変化

②-1の実践では、日記が完成すると、音声ボタンを押して、何度も再生し、写真やイラストの内容とセンテンスを結び付けている様子が見られた。この学習を繰り返すことで、順序立てて話しをすることが身に付き、「だれが」や「なにが」の部分が抜け、伝わっていないと感じたら、自分から言い直して伝えようとするようになった。また、日記を順序立てて綴る活動を通して、具体的に伝える話し方のパターンが習慣化されてきた。以前、伝わらない時は諦めたり、違う話をしたりしていたが、現在では言い方や言葉を変えることで伝えようとしている。

②-2で、生活背景を知らない人に対して「伝える」→「伝わる」ことが分かったと、「伝えたい」と思う人が広がったようで、現在までに校内の33名の職員（全員、顔と名前が一致）に「伝える」という活動を行ってきた。

①色のマッチング課題【視覚・操作】

TV画面と同じ色のスポンジを同じ色のコップに入れる。
見て操作をするための課題。



②3段ボックス課題【視覚・言葉理解（上中下）・空間認知・操作】

- ・「うさぎはどこにいますか？」→「3段ボックスの真ん中にいます。」
- ・「真ん中には何がいますか？」→「猫です。」
- ・「うさぎのお部屋は3段ボックスの一番下です。」→実際に人形を入れる等



③お隣さんはだれ？／曲がり角チャレンジ

【視覚・言葉理解（左右）・空間認知・感覚】

- ・「Yくんの右に座っているお友達は誰でしょう？」等の質問のやりとりを行う。
- ・車椅子での移動の際、曲がりの度に、左右どちらに行くのかを質問する。



④数字のマッチング【視覚・操作】

- ・「色のマッチング」と同様。こちらは数字（5択で実施）選択できたら、教師に渡す。



○取り組みの結果と事後の変化

これらの課題に取り組んだ初期の頃は、どれも全く答えることができなかったが、実体験（操作）を繰り返すことで、理解が広がっていった。継続することで、「よく見ることのスキル」と「空間を認知するためのスキル」が身についていった。結果、取り組むことが難しかったiPadアプリでのマッチングができるようになった。「Switch Accessible Puzzle」というアプリの入力を、シングルタッチに設定することで、型はめを行っている。7月には、Number（数字）のマッチングが4割程度しか正解できなかったが、現在（2月）は、どの型はめ問題であっても約9割の正答率である。また、数に関しては1～10までの数概念を習得し、2数の大小比較ができるようになっている。「6」と「9」はよく間違えていたが、「下に丸が6で、上に丸が9です。」と言いながら、覚えている。このことから、形を捉える上で、書いて覚えるという運動動作の代わりに言葉によって記憶していることが分かる。



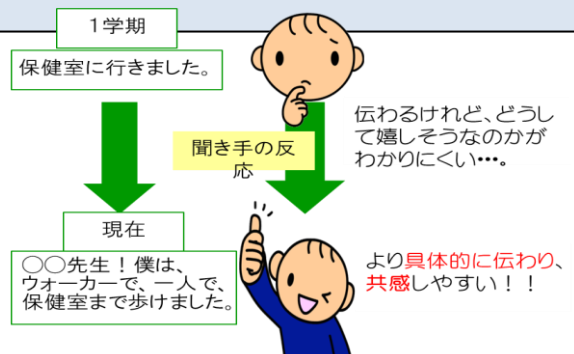
【実践のまとめ】

Yくんの本年度の大きな変化としては、以下の2点である。

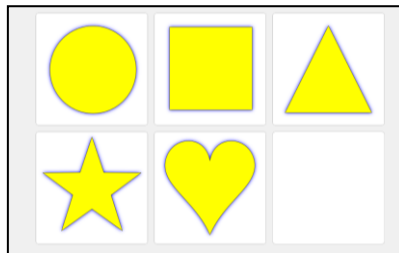
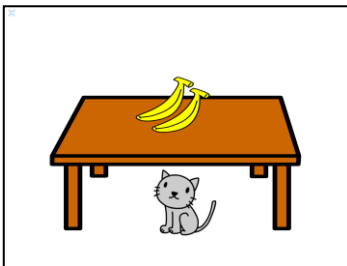
① 5W1Hの内容を入れながら、4～5語文を自分で話せるようになった。それによって、相手に具体的に伝わるようになった。

具体的に伝えるための方法（話し方や語順）を身に付けることで、より具体的に伝わり、聞き手からの共感を得やすくなった。

しっかりとした反応をもらうことで、「伝わった」ということが分かり、自信をもつことができた。そのため、家庭でも学校での出来事を少しずつ話すようになったのではないだろうか。



② 「見ること」の学習を通して、形や空間を表す言葉の理解が進み、数字や「かず（量）」が分かるようになった。また、平仮名のマッチングなども少しずつでき始めている。



実践を通して、目で情報を得ることや、具体物を操作しながら、形や空間を表す言葉の理解を進めてきた。それによって、空間や形を捉えるスキルが向上した。図を見て、「テーブルの下にはなにがいる？」という問題にも答えられるようになり、平面の世界での

上下左右の理解もできるようになった。また、図形に関しても、理解が進み、図の5種類の図形の名称と形が一致している。このような視空間認知の向上が、数や文字の理解を支えている。文字の1文字のマッチングに関しても、「あいうえおにぎり」というアプリを使用して、5択の中から同じものを、7割程度の正答率で選択することができているところである。今後も学習を継続し、音と形を一つずつ一致させていくことや、平仮名を習得できると考えている。



○その他エピソード

～家庭での変化～

保護者との懇談の際に、家庭でできることが少ないとのことから、何か自分でできることを見付けたいと、保護者も希望していた。日常生活を振り返ると、DVDやTV番組の好きなシーンを繰り返し視聴することが、Yくんの家庭での余暇活動の大きなウエイトを占めていた。番組内の好きなシーンに巻き戻して再生するパターンを20～30分間繰り返す。しかし、その際のリモコンの操作係は母親だった。数年前、学習リモコンとジェリービーンスイッチを繋げて、2つのスイッチを再生と巻き戻しに設定し本人に操作させようとした。しかし、嫌がって全く自分でやろうとしなかったため、そのままになっていた。それを、保護者と話を重ねる中で、今年10月頃から再開することにした。

また、学校で排泄予告を自分でできるようになってきたため、家庭でも排泄の自立を目指して布パンツで過ごすようにした。以下は2月に行った保護者との懇談の記録である。

保護者：再生と巻き戻しの2つのスイッチの意味が分かってからは、一人で20～30分間過ごせるようになって。それまでは、呼ばれる度に何回も、リモコンを操作しないとイケなくて、大変でした。全部を流して見てくれれば楽なんですけど、同じところばかりだから。ご飯の準備をしてる時に、何回も。何回も。

採択者：2つのスイッチ使いこなしてるんですね。Yくんが思う通りに、操作して自分で録画を見ることはできていますか？

保護者：そうですね。うまくいなくて、イライラして連打してることもありますけど。

最初は、それこそできなくて、連打してめちゃくちゃになることが多かったんですが、随分と（そういうことが）減ってきました。30分間くらい黙って見ます。弟に「お兄ちゃん、すごい！」と言われるのも嬉しいみたいで。最近は、鑑定番組に凝っていて、高額のお宝が出てくる回を、楽しそうにずっと見続けています。同じとこばかり。なかなか終われないくらいです。

採択者：TVを見ることの中で、お母さんの登場が随分と減りましたね。トイレの方はどうですか。

保護者：帰宅後、夕食後、就寝前等、時間を決めてトイレに座るようにしてました。前は、座ることをものすごく拒否したり嫌がったりしてたんですけど。最近は自分から、「寝る前のトイレに行かなきゃ。」とか言います。外出先でも（排泄の有無等を）言うことが多くなったんです。外で「気持ち悪いから（紙パンツを）変えて。」って言うんですよ。だから、すぐに変えられるようにテープタイプのものを買いました。家で、トイレにかかる時間はすごく減ったと思います。

採択者：外出先でも伝えるんですね。それは驚きです。スイッチもトイレも以前も取り組まれていたことがありましたよね。以前と何が違うんでしょうね。

保護者：時期がちょうどよかったんだと思います。

リモコンとトイレで生活が変わりました。Yくだけじゃなくて、家族の生活も変わっていると思います。ほんのちょっとした事なんでしょうけどね。大きな変化でした。そういえば、この間、（学校に）迎えに行った時に、自分で帰りの準備をしてたでしょう。あれを見て、あ～動かないから、あんまりさせてこなかったけど、できそうなことがあったら、家でもやらせてみようって。（以下、省略）



耳からの情報に頼っていたYくんが、目を使って「見ること」ができるようになったことで、家庭でも自分の力でできることを増やしていることが伺えた。また、保護者との懇談を通して、生活に生きる力を身に付けていくことに大切さを改めて感じた。今後も日常生活全体の中で「できること」を増やし、自信を持って生活できるように支援していきたい。

○今後の展望

今回の実践では「日記」を題材にし、Yくんの経験を主に綴っていったが、それだけではなく、Yくんのやりたい事や好きな事（相手が予想がつきにくい内容）を伝えることができるように、学習を進めていきたい。また、今回の実践では、日記につけているシンボルマークを見せることで、次に何を綴ればいいのかということ教師側がリードしてきたが、今後は自分で論理的に考えて、文章を綴れるような方向で学習を進める。さらに、自分の考えを巡らせたり、より深く考えたり、記録したりするためにも文字の習得は、合わせて継続する。

Yくんは操作面に関してはかなり制限があるため、タップ以外の操作は難しい。自らiPadを起動させることやセッティングをすることは難しいが、誰かに依頼して起動してもらうことは可能である。そのために、伝わる話し方の学習を継続して行ってきた。今後は、相手にきちんと正確に伝えるための「コミュニケーションの道具」としてや、文字や数等の認知的な学習を行う際の「学ぶ道具」としての役割が大きくなっていくと考えている。自作教材ではなかなか対応できなかった音声のフィードバック等はYくんの学びを支える上で非常に重要である。「これがあれば学ぶことができる」「分かるが増える」「伝わる」と、Yくんが実感できるような活用を今後も進めていきたい。Yくんの発達を見ながら、その時々に必要なiPadの使い方を、今後も検討しながら実践を進めていきたい。